

# 國學院大學学術情報リポジトリ

神谷邦淑「博物館」における引用文献に関する一考察：ジェームズ・ファーガソン著 History of the Modern Styles of Architecture

|       |                                                                                                                           |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 山内, 智子, Yamauchi, Tomoko<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000511">https://doi.org/10.57529/00000511</a>                                         |

# 神谷邦淑「博物館」における 引用文献に関する一考察

—ジェームズ・ファーガソン著

*History of the Modern Styles of Architecture*—

山内智子

## はじめに

日本における博物館学の論考は、明治8年(1875)の栗本鋤雲による「博物館論」が濫觴といわれ、同21年には岡倉天心が「博物館に就て」を発表し博物館論を展開した。明治20年代には、坪井正五郎の「パリー通信」「ロンドン通信」をはじめとする展示論の研究、箕作佳吉の博物館論などの研究が発表され、このち博物館学は学問としての確立期に移行することとなる。

同時代において、明治26～27年に3回の分載で『建築雑誌』に掲載された、神谷邦淑による「博物館」<sup>(1)</sup>は、当該期の博物館学において最長論文であり内容においても今日に通じる博物館思想を有する。また、東京帝国大学卒業論文と推定される当論文は、博物館建築に関する日本最初の論考であり、奈良・京都両帝国博物館竣工以前に執筆されていることから、その先駆性を見ることができる。

神谷に関する先行研究は、経歴については建築史学の視座から九州大学名誉教授・片野博による「八幡製鉄所初代事務所の建築家に関する調査報告」<sup>(2)</sup>がある。また、博物館学の観点から当論文を発掘し博物館思想を研究した國學院大學教授・青木豊の「神谷邦淑」<sup>(3)</sup>がある。しかしながら、神谷が論文執筆の際に参考にしたと思われる先行研究や引用文献、博物館に関するほかの執筆論文や業績などがいまだ確認されていないのである。

神谷は、海外の事例まで論述がおよぶ博物館や建築学の知識をどのように得たのか。本稿は、新たに確認した資料や文献から、神谷の「博物館」に引用された参考文献を特定し検証することを目的とする。加えて、明治20年代の博物館思想導入の一例としてその様相を考察するものである。

## 1. 神谷邦淑「博物館」に関する先行研究

青木豊は、博物館学において存在が認識されていなかった建築学の論文「博物館」を発掘し、その博物館思想を研究して「神谷邦淑」を発表した。当該研究では、神谷の「博物館」を博物館学理論と博物館技術論の両者に及ぶものと位置づけ、「事実これまでの博物館学では最長論文であったと同時に、内容に於いてもついつい時代錯覚を覚える程の見識を有するものである」<sup>(4)</sup>と評している。

その構成は、神谷の「人物像」と「神谷邦淑の博物館学」となっており、「人物像」では前出の片野博の研究をふまえ、その人物像を概観している。

「神谷邦淑の博物館学」では、論述の注目点を上げ、博物館の定義、博物館の必要性、英語のミュージアムの語源、博物館の目的、博物館の占地要件、博物館建築の耐火・耐震・防湿、博物館の照明論などについて具体的に検証している。

神谷の博物館思想の特徴として、青木は、資料保存を重視している点に注目し、博物館の目的や占地要件をはじめとする論述から共通して読み取れることを指摘している。また、建築学の視座から具体的に踏み込んだ論述がなされた耐火・耐震・防湿に関しては、耐火構造物の建築資材としてレンガと鉄を不適格とした上で人造石のテラコッタの優位性を示している点や、ドライエリアの必要性をあげている点などを指摘し、神谷が高い資料保存意識を有していたことを評している。さらに結語では、以下のように述べている<sup>(5)</sup>。

片野によれば、東京大学工学部建築学科図書室に照会した結果から、本論文は神谷の卒業論文であったと推定できると記している。卒業論文の可能性が高いことにも先ず驚くと同時に、建築学のレベルの高さに驚かされる。博物館を熟知したこれらの内容は、明治二十六年（一八九三）とは到底信じられない突出した博物館学の論文であると評価できよう。

また、最大の疑問として、論文執筆の先行研究や底本が全く見当たらない点を指摘しており、先行研究の存在を示唆しながら論述を締めくくっている。

## 2. 神谷邦淑「博物館」の概要

神谷邦淑が「博物館」を発表した明治20年代は、幕末期に西洋から紹介された博物館についての知見が広まり、日本人建築家による博物館建設がようやく始まる時期であった。周知の通り、イギリス人建築家ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852-1920）が設計した上野の博物館（後の帝国博物館）は明治14年に完成し、同15年から博物館本館となっていた。一方、工部大学校造家学科第1期卒業生の建築家・片山東熊の設計による帝国奈良博物館は、明治27年に竣工し、同

28年の開館であり、帝国京都博物館は明治28年に竣工し、同30年の開館である。重ねて述べるが、神谷の「博物館」は、奈良・京都両帝国博物館開館以前の明治20年代前半に執筆された論文である（明治24年、帝国大学工科大学造家学科撰科修業の卒業論文）<sup>(6)</sup>。

当該論文の構成は、博物館の必要性や有益性を述べた「序論」に始まり、博物館の「原名及沿革」「目的及利益」「位置及外観」「配室の概要」「中庭の利益」「構造及材料」「採光の諸説」「換気及給温」「建築の現例」「雑件」となっており、洋邦の博物館の歴史や博物館建築の具体的要件、収蔵品の増加を見越した増築の予測、欧米諸国の博物館建築の現況にまで言及したA4判上下段22頁の長文である。

「序論」の冒頭では、博物館を以下のように定義づけし<sup>(7)</sup>、その必要性と有益性を述べている。

博物館は何等の必用ありて起る乎、卒然之を觀只一種都會の盛觀を添ふるの贅物たるに過ぎずとなすは抑々過てり矣、何うや此一塊の建物は能く國華を輝かし、國粹を保ち學者を助け、凡俗を導き而して製造工藝を美にし而して殖産興業を盛んにす、視來れば是れ富國利民の根源に志て經世上復た此くの如き有益の建物あらざるなり

続く「原名及沿革」では、ミュージアムの語源および2000年前のギリシャにおける博物館の起源に始まり、博物館の変遷を第1～4期に区分してまとめた岡倉天心の「博物館に就て」（後述）を踏まえた論述を展開している。

「目的及利益」の冒頭では、「博物館の目的ハ過去及現在の物件を保存貯蓄するにあり而して其利益は公衆をして是に就て考究せしむるにあり」<sup>(8)</sup>と明確に述べており、以降の論文各所に、先述の青木豊が指摘した通り資料保存に重点を置いた神谷の博物館思想が窺える。

博物館建築に関わる点では、「位置及外観」において、防火、採光・通風、防塵、防湿、好風景の地など博物館用地に関する5項目の要件を上げて最適地を論じ、交通の利便性についても言及している。博物館の外観については、装飾過剰な博物館建築には否定的な論述が見られ、国家の宝庫としての壮麗さと防火防犯のための堅牢さを併存させることは建築家が最も苦心する点である、とも著している。

「配室の概要」では、博物館の形状として口の字型・長方形型・長方正方混合式を示しヨーロッパの実例を紹介するとともに、列品室・広間・預蔵室・装成室・監視入室・事務室・宿衛室・休憩所・便所・切符賣出場・演説室・職員用通廊及び階梯など、博物館を構成する各室の役割と配置を述べている。続く「中庭の利益」では、いわゆる博物館疲労について触れており、中庭は採光と換気のためだけでなく観客の心身疲労解消のためにも必要としている。この内容は、近代的な博物館の見学者・体験者が希少であった明治中期の日本において特筆すべき点で

ある。

「構造及材料」「採光の諸説」「換気及給温」では、建築学の専門領域となる海外の研究諸説を引用しながら博物館建築論を展開している。耐火・防湿・耐震・避雷・排雨・防盜の面から考察した博物館内外の構造材、ドライエリアの設置、側照法と頭照法を中心とした採光法、窓の設計法と構成および摺りガラスの採用、反射光の回避、グレア防止と隔子（スクリーン）の使用、換気と給温の目的と具体的設備など、注目すべき論述は枚挙にいとまがない。

神谷の「博物館」は、当該期の日本において先進的な博物館建築論であり、現在の博物館建築論に受け継がれる基本要件を明示した内容であった。また、実際に博物館の建築設計に携わる建築家および設立主体者に博物館施設とはいかなるものかを知らしめる画期的な論文であったといえる。

さらに筆者が着目するのは、ヨーロッパ各地の博物館について論述した「建築の現例」であるが、本稿の主題となる部分であり後述する。

### 3. 神谷邦淑「博物館」を構成する引用文献

神谷邦淑の「博物館」には、論文執筆の際に参考にした引用文献名が表記されていない。しかしながら、「岡倉文學士」なる記述や、海外の研究者・建築家と思われる洋名および文献の引用と推測される部分が多数確認できることから、これまで博物館学では確認されていない先行研究や参考文献があると考えられる。当該論文を構成する引用文献を特定するため、研究者名・建築家名から検証する。

#### 3-1 「博物館」に引用された研究者名

論文中の「原名及沿革」において「岡倉文學士」として名前が上がる岡倉天心（1863-1913）は、明治21年（1888）に『日出新聞』紙上で「博物館に就て」<sup>(9)</sup>を発表した（同22年に「美術博物館ノ設立ヲ賛成ス」との題名で『内外名士日本美術論』に再掲）。岡倉の「博物館に就て」は、周知の通り、明治中期の博物館学確立期の始まりを示す博物館論である。

先に述べたように神谷は、岡倉が第1～4期に区分してまとめた博物館の変遷を引用して博物館の原名から沿革をまとめている。神谷による岡倉の文献引用については、『明治期博物館学基本文献集成』に収載された「人物略伝」（「岡倉天心」）において下湯直樹が指摘しており、岡倉の当該論文について「これ以後の博物館に携わる人間にとって必須文献であったことは明白」<sup>(10)</sup>と述べている。

一方、「目的及利益」に記された「ドクトルフェノロサー」「ドクトルビゲロー」は、お雇い外国人として来日していたアーネスト・フランシスコ・フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908）と、日本美術研究家のウィリアム・スタージス・ビゲロー（William Sturgis Bigelow, 1850-1926）である。

続く「位置及外観」「配室の概要」「中庭の利益」に研究者名は見当たらず、「構造及材料」「採光の諸説」「換氣及給温」「建築の現例」では海外の建築家・研究者と思われる洋名が16名確認できた。

この中で、姓のみの表記は、「ウィツチュールド」「アンステッド」「ライロル」「スキンケシー」「ウィルト」「ガルトン」「チンドル」「トービン」「フエルガツソン」「カドウィツク」、そして前出の「コンドル」の名も見られる。

一方、「ヂュル、ブルデー」「ウイリアム、チャンパー」「ジョン、ラスキン」などの表記は、現代の句読点表記では「ヂュル・ブルデー」「ウイリアム・チャンパー」「ジョン・ラスキン」となりフルネームと推定できる。「ブルデー」は1873年の第3回パリ万博においてトロカデロ宮殿を設計したフランスの建築家ジュール・ブルデー (Jules Bourdais, 1835-1915)、「チャンパー」はキューガーデンのパゴダやサマセット・ハウスを設計したイギリスの建築家ウィリアム・チェンパーズ (William Chambers, 1723-1796)、「ラスキン」は*The Seven Lamps of Architecture* (『建築の七燈』) を執筆したイギリスの評論家ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) と推測される。

幕末以降、海外の博物館事情を知る手がかりとなったのは、名村五八郎元度の『亜行日記』をはじめとする遣米・遣欧使節団の見聞録、佐野常民による『澳國博覽會報告書』などの海外博覧会関係文献、そして留学生による見聞録などである。

しかしながら、帝国大学工科大学で建築学を学ぶ神谷にとって、博物館や博物館建築の研究とは、第一義として実際に建築設計するための研究である。そのために必要とされる先進の建築学の知識や研究成果を得ようとするならば、海外の建築学専門書を拠り所とするのではないだろうか。神谷にとって身近な海外の文献といえば、帝国大学工科大学図書館が所蔵していた建築学の洋書であり、これらを参考に「博物館」が執筆された可能性が高い。

### 3-2 「建築の現例」に見られる研究者名「フエルガツソン」

「建築の現例」は、イギリス・ロシア・ドイツ・イタリアなど海外の多数の博物館について立地や外観、博物館の平面構成、展示室の様子などを建築学の視点から具体的に論述した内容であり、項末に上野博物館についての論述を付け加え、論文全22頁のうち5頁を割いている。

前出の青木豊による「文中に挙げられる欧米諸国の数々の博物館についてもすべて実踏したとは考えがたい」<sup>(11)</sup>との指摘に筆者も同意するものであり、明治20年代前半にこれらの博物館に関する知識を神谷は何から得たのだろうか。

ここで、「建築の現例」に見られる「フエルガツソン」なる洋名に着目する。現在のところ、神谷が洋行した記録は確認されておらず、「フエルガツソン氏曰く」という記述を見ても、論文執筆の際に同研究者の文献を参考にしていると推定さ

れる。

「フェルガッソン」なる人物について調査すると、建築学の史料および建築史学の文献に見ることができた。なお、「フェルガッソン」の発音および著作タイトルにおける冠詞「A」「The」の有無については、文献ごとに表記が異なる。表記不統一となるが、以降は各文献の表記に従う。

建築史家の村松貞次郎は、昭和34年(1959)の著書『日本建築技術史』で、明治18年ごろの工部大学校の講義で使用された参考書の1冊である「フェルガッソン氏造家学史」が、James Fergussonの*Illustrated handbook of Architecture* (二巻、London、初版1865年)を指すと推測している<sup>(12)</sup>。

工部大学校の参考書については、建築史家・稲垣栄三が同様の指摘をしている。日本建築学会より昭和47年に発刊された『近代日本建築学発達史』の「10編 建築史学史 1章 建築史研究の発端」の中で稲垣は、「工部大学校学課並諸規則明治十八年四月改正」において、土木学科卒業生でさらに造家学を修講する者に対して指定された参考書の中に、フェルガッソンの『造家学史』(James Fergusson: *The Illustrated Handbook of Architecture*, 2巻, London, 1855)があると指摘している<sup>(13)</sup>。フェルガッソンに関する同史料の記述は、以下の通りである<sup>(14)</sup>。

#### 第六節

土木學卒業ノ生徒ニシテ更ニ造家學ヲ講修セント欲スルモノハ (中略)  
(参考書ハ「フェルガッソン」氏造家學史「ローセンガルデン」氏ノ同書「パーカー」氏ノ「ゴシック」造家略史トス)

稲垣と村松が指摘する同書の出版年が異なるのは、初版と重版の混同によるものと推察されるが、以上のことからフェルガッソンの『造家学史』とは、ジェームズ・ファーガソンの*The Illustrated Handbook of Architecture*<sup>(15)</sup>と推定される。

また、日本の建築史学について述べた稲垣によれば、明治以降の建築史学は工部大学校における西洋建築史教育によって開始され、明治10年に来日したジョサイア・コンドルがその講義を担当した。歴史に相当する課目は、「造家式ノ沿革」と呼ばれ、内容は「工部大学校学課並諸規則明治十八年四月改正」で知ることができる<sup>(16)</sup>。「造家式ノ沿革」の記載は以下である<sup>(17)</sup>。

#### 四 造家式ノ沿革

造家沿革史ノ大意歐羅巴及ヒ亞細亞諸國ノ首要ナル造家諸式ノ説明則チ埃及式アツシリア式波斯式印度式支那式日本式希臘式エトラスカン式羅馬式ハイザンタイン式ロマネスク式サラセニツク式ムーリシ式諾曼式コシック式再新式近世歐式等ナリ又羅馬式及ヒ中古式ノ穹窿直立式則チ扇狀穹窿ニ就テ講



## 義ヲ授ク

さらに工部大学校における西洋建築史の講義について、稲垣は次のように述べている<sup>(18)</sup>。

明治初年に開講された西洋建築史は、その内容がエジプト・アッシリアからはじまる西洋の諸様式に及ぶとしても、また参考書として学生の座右にあったファーガッソンのハンドブックが、諸様式を通史的に叙述しているとしても、建築の設計に直接必要な知識として修得されたのであった。西洋の諸様式に通暁することは、そのまま当時の建築家のレパトリーと技術上の自信とに結びつくのであって、日常の建築活動から無関係な知識としてあったのではない。工部大学校造家学科は、西欧の技術をそのまま日本に移植する技術者としての建築家を養成することをもって目的としたのであったから、西洋の諸様式に関しても、あたかもヨーロッパ19世紀の建築家が学んだように学んだのであった。

以上の論述から、「ファーガッソンのハンドブック」は、建築学を学ぶ学生にとって「座右」と呼ぶほど身近な存在であり、建築の歴史および建築様式を学ぶための参考書であったことがわかる。また、工部大学校造家学科が建築家養成を目的とした教育機関だったことは明白である。

なお、工部大学校における各学科の講義は、概ね英語で行われていたことが同史料の「第二十七章 学科細目 第一節 英學」<sup>(19)</sup>に記されており、英会話や筆記の能力も求められたことが確認できる。神谷邦淑が帝国大学工科大学に在学していた明治21年（1888）から同24年については、造家学講師としてジョサイア・コンドルが教鞭をとっており<sup>(20)</sup>、英語による講義が継続していたと推察される。

### 3-3 ジェームズ・ファーガソン (James Fergusson) とは

前項の検証で明らかになった「フエルガッソン」すなわちジェームズ・ファーガソン (James Fergusson, 1808-1886) は、イギリス・スコットランド出身の建築史家である。ファーガソンは、1808年、医師ウィリアム・ファーガソンの息子としてスコットランド西海岸に位置するアイルに生まれた。エジンバラ高校やハウズローの私立学校で教育を受けた後、インドのカルカッタ（現コルカタ）に渡り藍工場を設立して成功させ、10年後には仕事を引退してロンドンに戻った。ファーガソンは、正式に建築学を学んだ建築家ではなかった<sup>(21)</sup>。しかしながら、インド在住中にインド建築や中国建築について研究し、1854～58年にインド建築に関する2冊の本を出版した。また、1855年には *Illustrated Handbook of Architecture*（2巻）、1862年には *History of the Modern Styles of Architecture* を出版



した。さらに1865～67年には、前述の2冊を再編集して *A History of Architecture* (3巻) を出版した<sup>(22)</sup> (ファーガソンの著作3タイトルの日本語翻訳書は未刊)。

ケンブリッジ大学教授でイギリスの建築史家デイヴィッド・ワトキン (David Watkin, 1941-2018) は、1980年の著書 *The Rise of Architectural History* (『建築史学の興隆』1993年 桐敷真次郎訳) においてファーガソンの *A History of Architecture* を「英語で書かれた最初の真面目な世界建築史」と紹介し、ファーガソンのインド建築への造詣が、ヨーロッパ建築の研究に新鮮で独特なアプローチをもたらしていることを述べ、さらに以下のように評している<sup>(23)</sup>。

本文と木版刷りの図版のいずれも注目すべき業績を示しており、そのなかでファーガソンは驚くほど広範な時代と国々についての最新の研究成果を提示している。この本はまた、今日読んでもそうであるように、きわめておもしろく読める本であった。この本がたちまち人気を博し、第二版が一八七三年に、第三版が一八九一―九三年に現れたことも不思議ではない。(桐敷真次郎訳)

ワトキンの『建築史学の興隆』を翻訳した桐敷真次郎は、ファーガソンを「世界の視野のもとに建築の通史を書いた」と評しており、その著作について「どう見ても木版画とはまったく思えない精密精巧な図版を多数入れた建築史の労作」と述べている<sup>(24)</sup>。

ワトキンならびに桐敷が指摘する通り、ファーガソンの著作は、建築物の外観や平面図、建物の部分の解説図など膨大な数の図版を所載している。博物館に関する図版も多数あり、これらの図版が神谷の論文執筆の参考になったと容易に推察できる。

### 3-4 帝国大学工科大学図書館の蔵書

ここで、神谷邦淑が帝国大学に在学していた明治20年代前半、帝国大学工科大学図書館が所蔵していた建築学の専門書(洋書)について検証する。

工学寮や工部大学校など帝国大学工科大学の前身組織が所蔵した洋書および洋書目録については、建築史や工学史の視座から菊池重郎<sup>(25)</sup>、滝沢正順<sup>(26)</sup>、池上重康<sup>(27)</sup>らの研究がある。

明治初期に日本政府が蒐集した舶載建築書を研究する建築史家の池上重康は、工部大学校の3種類の洋書目録(明治9・11・13年)と、明治24年(1891)の帝国大学図書館洋書著者目録とを比較・比定した一覧表「工学寮ならびに工部大学校所蔵建築関連洋書一覧」<sup>(28)</sup>を作成した。

この中で“Architecture”に分類される洋書142タイトルから、ジェームズ・ファーガソンの著作を探すと、① *History of the Modern Styles of Architecture* (1873

年)、②*History of Architecture in All Countries, From the Earliest Times to the Present Day* (1874年)、③*History of Indian and Eastern Architecture* (1876年) の3タイトルが確認できた。池上の一覧に従えば、この3タイトルは明治11年、同13年、同24年の洋書目録に記載があり (②は同9年の洋書目録にも記載)、神谷の在学中に図書館に所蔵されていたと推定される。さらに、神谷の「建築の現例」では西欧諸国の博物館を紹介していることから、引用された参考文献は①②、いずれかの可能性が高い。なお、工部大学校時代に参考書として使用された *The Illustrated Handbook of Architecture* (1855年) は、池上の一覧では確認できなかった。

#### 4. 神谷邦淑「博物館」とジェームズ・ファーガソンの論旨

これまでの検証を踏まえ、神谷邦淑の「博物館」の参考文献と推定されるジェームズ・ファーガソンの著作2タイトルから、*History of the Modern Styles of Architecture* (1873年出版)<sup>(29)</sup>について検証する。中表紙の記載から第2版である(初版は1862年)。

同書の構成は、序章(“Introduction”)に始まり、「イタリア」「スペイン・ポルトガル」「フランス」「イギリス」「ドイツ」「ヨーロッパ北西部(ベルギー、オランダ、デンマーク、ハンブルク、スウェーデン・ノルウエー)」「ロシア」「インド・トルコ」「アメリカ」と各国のさまざまな建築様式と各種の建築物を紹介し、さらに「劇場」「土木工学・軍事工学」、最後に付録として「大聖堂」にまで言及した全584頁に及ぶ大著である。図版は計331枚が収載されている。

同書の記述と、神谷の「建築の現例」の論述を照らし合わせると、複数の一致する内容を確認した。以下は、主要な博物館についての検証結果である。

##### 4-1 英国博物館(“British Museum” 大英博物館)

1753年に設立された英国博物館(大英博物館)について、神谷は「世界の大博物館」として「建築の現例」の最初に取りあげている。はじめに、博物館の全形から外観、建築様式、建物正面の44本の列柱、平屋根などについて触れ、大車寄せの長さや柱の径、大入口の扉のサイズなど、それぞれの寸法に関しても詳細に述べている。また、万が一の失火に備える樋水を利用した消火設備にも言及している。新しい展示室については、天窓や壁、小屋組などの構造、屋根の構造・材質についても述べている。

神谷がファーガソンの *History of the Modern Styles of Architecture* を引用していると推定される論述部分は以下である<sup>(30)</sup>。

フエルガツソン氏曰く英國博物館は其土地には一の障害物件なり其建築の形畫は實施以前に長久且十分に注意を加へて作られ其經濟の點に至ては制限

なく費用を投せられたり而して其莫大の費額の少くも半數は諸種裝飾の物件に投せられたるならん全建築を犠牲に供したる中庭は已に減び而して車寄ハ正さに看客に不便を與へり彼の正面を屈曲して兩側隅を回りにて止まれる所の四拾四個の無用なる柱に至ては拙も亦甚しと云へし其屋上より照らさるゝ大階段の位置を北方に取り（北方の側照は彫刻物に尤も適す）而して側照を受ける彫刻品室は南方車寄の蔭に掩はる設令ひ之を以て快美の感を與ふとするとも兎に角如此位置は不都合と考去せざるを得ざるなり云々

以上の神谷の論述に対して、ファーガソンの著述は以下である（原文は註に記載）<sup>(31)</sup>。

その土地には、かつて何の障害物も無かった。計画は、実施以前に長期間にわたり慎重に精査され、資金は惜しみなく投じられた。もしその建物に100万ポンドの費用がかけられているとしたら、少なく見積もっても半分の金額が利便性に欠ける裝飾や裝飾品の手配に浪費されたといっても過言ではない。建物全体を犠牲にした中庭はすでに失われ、柱廊玄関（車寄）は公然の迷惑とされている。しかしそう簡単に取り除くことはできない。この現代的なファサード（正面外観）に沿って両隅まで曲がりくねる44本の無駄な柱に至っては、拙策この上ない。（中略）屋上から照らされた博物館の主階段は北側に設置されている。博物館や彫刻品室では北側の窓からの側照は彫刻物に最良の光といわれているが、ここでは彫刻品室は南側に面して設置され、北側からの側照は柱廊玄関の影でほぼ完全に遮られている。たとえしつらえ自体は好ましいと感じても、とにかくこのような位置は不都合と考えざるをえない。（筆者訳。カッコ内は筆者加筆）

ファーガソンは、大英博物館の象徴的な外観といえる建物正面に立つ44本の列柱と柱廊玄関を辛辣に批評している。中庭がすでに失われているという記述は、同書の出版が1873年であることから、1852年から1857年に建設された円形ドーム型の読書室<sup>(32)</sup>がすでに完成していたためであろう。

注目すべきは、博物館や彫刻品室では北側の窓からの側照が適しているという博物館展示における側照法を展開している点である。陳列室の自然光線（側照法）に関しては、古くから実際に知られたこととして岸田日出刀<sup>(33)</sup>や半澤重信<sup>(34)</sup>らが指摘しており、この時代の建築学においても基本とされた知識であったと推定できる。また、ファーガソンが博物館思想を有していた可能性もあり、神谷がこの部分を引用した理由として側照法の記述を重視したからとも考えられる。



図1 “Facade of the British Museum”  
(大英博物館正面外観)

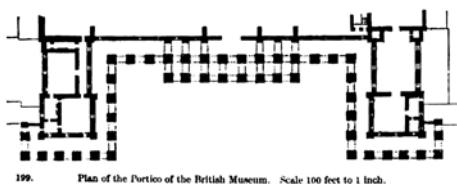


図2 “Plan of the Portico of the British Museum”  
(大英博物館正面柱廊玄関平面図)

両図とも James Fergusson, *History of the Modern Styles of Architecture* より転載

#### 4-2 サンクトペテルブルグの帝国美術博物館 (“New Museum of St. Petersburg” エルミタージュ美術館・新エルミタージュ)

現在のエルミタージュ美術館は、サンクトペテルブルグの市街地中心を流れるネヴァ川に沿って建てられた5つの建物で構成される。最も古い「冬宮」は、ロマノフ王朝皇帝の宮殿として1735年に完成し、1762年にはバロック様式で再建された。冬宮の再建以降約100年の間に、小エルミタージュ（1775年）、エルミタージュ劇場（1786年）、旧エルミタージュ（1787年）、新エルミタージュ（1852年）が建設された。この間の1837年には、冬宮が火災に見舞われ内部焼失したが同年復元されている。小エルミタージュは、1762年にロシア皇帝に即位したエカテリーナ2世によって増築された建物であり、ここに設けられた美術ギャラリーが現在の美術館の発祥といわれる<sup>(35)</sup>。

旧エルミタージュ完成後の1791年にサンクトペテルブルグを訪れ、エカテリーナ2世に謁見したのが大黒屋光太夫（1751-1828）である。光太夫からの聞き取りをもとに、江戸時代後期の蘭学者で幕府医官の桂川甫周がまとめた『北槎聞略』には、18世紀末の都城の様子が描写されている<sup>(36)</sup>。

神谷が「魯都聖彼得堡の帝国美術博物館」と記したのは、現在のエルミタージュ美術館の中で最も新しい建物である新エルミタージュである。地図を確認すると、新エルミタージュは旧エルミタージュ南側に位置する宮殿広場に面して建てられているため、ネヴァ川対岸から見ると旧エルミタージュの背後に隠れる配置となっている。神谷は、同館の立地や外観の特徴を次のように述べている<sup>(37)</sup>。

魯都聖彼得堡の帝國美術博物館は市中最好の位置を撰みて子ヴハ河畔に之を建てたり東方に於て冬宮に接し其大さハ河よりミリヨン街までの間

四百八十尺河に向つて三百五十尺内部は畫廊を以て二局部に分つ一は大階梯を以て其半部を占め他は空所となす外部は其四面の構成各幾分の變化あるも概して皆同様の好注意を加へられたり二階になれる所は高六十六尺に達し三階になれる處は其パラペットの笠石まで八十四尺の高さあり長手の外面に於ては其切妻の頂點は敷石面より高九十八尺あり右等の寸法ハ實に建築的功績に向つて尤完全を得たりとはフェルガツソン氏の評なり且曰く往々華美なる構造をして落減せしむる處の虚偽の形畫を全く脱出せり毎階皆な各自に完備せられ其細飾に至ては詳かに古希臘の美功を襲へり只其軒蛇腹の突出其少にして爲めに外觀平元の趣あるは失策の最たるものなりと

最下階は平坦且堅固なり柱式は上階及屋下階のみに用う半沒柱（ぴらすたー）の裝飾を添へたり

この論述に対応するファーガソンの著述は以下である（原文は註に記載）<sup>(38)</sup>。

サンクトペテルブルグの新しい美術博物館は、(中略)その立地は市内で最良の場所が選ばれ、ネヴァ川のほとりで冬宮の東側に隣接する。現在完成している建物は、川からミリオン通りまでの480フィート、川に向かって350フィートの大きさで、敷地内部は絵画展示室によって2つに分けられている。ひとつは大階段が部分的に占め、もうひとつは何もない空間となっている。外觀の各4面はそれぞれ構成が多少異なるが、概ね同様に細部への配慮が見られる。二階建ての部分では、高さは66フィートに達し、三階建ての部分は屋根に付くバラストレイド(軒高欄)の笠石まで84フィートの高さに達する。建物の長尺面の中央部に配されたベジメントの頂点は、敷石から98フィートの高さがある。これらの寸法は、建築学的効果を十二分に上げており、それに加えて、華美な構造の建物が陥りがちな都市の景観を台無しにする見え透いたデザインから完全に脱却している。最下階は簡素で堅固であり、オーダー(柱式)は主要階と屋下階に限定され、アンタ(壁端柱)とピラスター(付け柱)で裝飾されている。各階は各々に完成していて、その細部裝飾に至つてはギリシャ芸術を特徴づける美しさで仕上げられている。ミュンヘンの建築家は大いなる器用さで精巧な仕上げと細部の美しさに力を注いだ。(中略)ただ、コーニス(軒蛇腹)の突出が少ないため、外觀が平坦な印象となっているのは失策といえよう。特に三階建て部分では、オーダーがひとつだけである。(筆者訳。カッコ内は筆者加筆)

新エルミタージュに関する神谷の論述のうち、前半の立地・外觀の特徴に関する部分をファーガソンの原文訳と対応させてみると、若干の省略や入れ替え、要約はあるものの、ほぼファーガソンの著述に沿って記述されている。さらに、後

半は展示室に関する論述となる<sup>(39)</sup>。

内部の畫廊配置は中央に大廊ありて其一方に小畫棚を置き他を通廊とし大階之に通ず而して此畫廊は建物の西面に添ふて連續せり是只美觀の爲めのみに非ずして實に其便利に關係せるなり館の或部に於てハ大に採光の點に欠くる所あり殊に下階に於て然り蓋し多分の日光を享有する希臘に於ては可なり其子ヴァ河濱の建築にして同様の形畫に出てたるは遺憾なりといへり

以下に示すのは、ファーガソンの著述から対応する部分である<sup>(40)</sup>。

館内の配置であるが、敷地中央を横切る絵画展示室は、ミュンヘンの中央にある大きな展示施設のように、片側に小品を収蔵する展示ケースを配置し、他は回廊として大階段に通じている。絵画展示室は建物の西面に沿って続いている。これは芸術的な効果だけでなく、利便性にも配慮した配置である。建物の特に下階では、採光が十分でないという多くの苦情が寄せられているが、これは容易に理解できる。もし建物が、陽光降り注ぐギリシャに建っているのであればよいが、ネヴァ川のほとりの建物であることを忘れ同様の設計を施したのは許しがたい。(筆者訳)

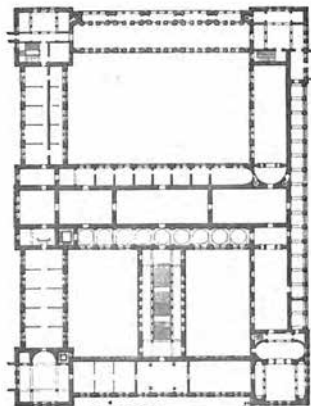


図3 “Plan of the New Museum at St. Petersburg” (エルミタージュ美術館・新エルミタージュ平面図)

James Fergusson, *History of the Modern Styles of Architecture* より転載

以上、エルミタージュ美術館・新エルミタージュについて、神谷の論述とファーガソンの著述を比較したが、当館に関する神谷の論述はこれが全てであり、ファーガソンの著述から同館の立地・外観の特徴・館内の配室など博物館の基本要件を引用し論述していることが明らかになった。

また、文中の長さの単位表記については、原文のフィートを尺に置き換えて記述している。1フィートは30.303cm、1尺は30.48cmと近似値であることから、置き換えが行われたと看取される。尺貫法による表記は、明治37年（1904）に発表された内田四郎による「繪畫陳列館」<sup>(41)</sup>にも見られる。



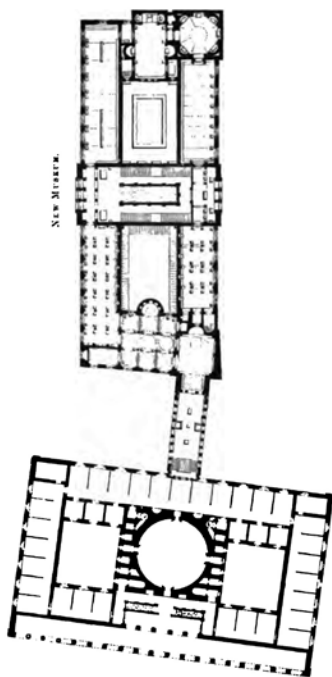
#### 4-3 伯林博物館 (“Museum at Berlin” ベルリン旧博物館)

ベルリンの博物館島 (ムゼウムスインゼル) にある Altes Museum (旧博物館) は、プロイセン王国初の王立博物館として1830年に開館した。設計を担当したのは、建築家カール・フリードリヒ・シンケルである。建設地として、王宮の向かいにある Lustgarten (「ルストガルテン」=庭園) が選ばれ、ここから博物館島の歴史が始まったといわれる<sup>(42)</sup>。神谷の同館に関する論述は、外観の特徴から建築の長所・短所に至る以下である<sup>(43)</sup>。

伯林博物館は正面車寄十八本のアイオニック式の柱を並立し其兩端は大なる角柱を以て綴れり此正面巾二百七十五尺軒蛇腹の高さ六十四尺而して此陰影の内には窓を設けず内部階段を置ける凹部を開けるのみ此車寄は現今歐洲にある多くの例の中に於て先づ申分の少なきものなりといへり然れども此建築の尤も大なる欠點は其位置に對して低きに過ぐるを是ならん歟古代法の建築を今世の目的に應用するは實に困難のをにして其美麗なる車寄の美たる所以は眞正面より見たる場合の外之を失却せざるを得ざるなり若し斜めに側面と共に之を一瞥するならば實に平凡なる建物に假面したるに過ぎすとフェルガッソン氏は言ひたり

この論述に対応するファーガソンの著述は、以下である<sup>(44)</sup>。

ベルリンは (中略)、博物館はミュンヘンの同種の博物館のどれよりも完璧で見事な建築である。柱廊式玄関 (正面車寄) は、2つの壁端柱の間に建つ18のイオニア式の柱から成り、幅は275フィートである。高さは、地面から軒蛇腹の上部まで64フィートである。また、非常に珍しい特徴として、この陰影の内窓を設けず、広々とした内部中央階段を設置する凹部を開放してい



238. Plan of the Museum at Berlin. Scale 100 feet to 1 inch.

図4 “Plan of the Museum at Berlin” (ベルリン旧博物館平面図) \*下部分が旧博物館  
James Fergusson, *History of the Modern Styles of Architecture* より転載



る点である。内壁を塗りつぶすように施されたフレスコ画はいただけないが、柱廊式玄関は現在のヨーロッパに建築された同様の柱廊式玄関より意義深く不適当な点が少ない。大いなる欠点は、建物の位置に対して十分な高さではないということである。博物館の前の正面スペースは広く、周囲には高い建物がいくつかあるが、同館の中央ドームを取り囲む正方形のブロックでは建物に必要な高さや尊厳を与えていると思えずさほど重要ではない。これは、古典主義の建築を現代の建築に応用する際に最も難しい点のひとつである。この美しい柱廊式玄関を真正面から見る時以外は、その美しさと合理性はすべて消えてしまう。もし、斜め方向から側面と共に見たならば、化粧漆喰の壁にみすばらしい窓が埋め込まれた三階建ての平凡な建物に仮面をつけたに過ぎないことに気づくだろう。(筆者訳。カッコ内は筆者加筆)

ベルリン旧博物館に関する神谷の論述は、以上がすべてであり、ファーガソンの原文と一致していることが明らかになった。

同館正面玄関の構造を説明した「内部階段を置ける凹部を開けるのみ」との神谷の記述は、ファーガソンの著書に収載された平面図(図4)より理解できた。また、同館の高さについて述べた「其位置に對して低きに過ぐるを是ならん」の部分は、簡潔なまとめになっており理由までは判然としなかったが、ファーガソンの原文「博物館の前の正面スペースは広く、周囲には高い建物がいくつかあるが、同館の中央ドームを取り囲む四角いブロックは建物に必要な高さや尊厳を与えていると思えずさほど重要ではない」の省略部分により、その理由が明らかになった。

同館は、ドイツで最初の博物館専用の建造物であり、プロイセンの宮廷コレクションの展示を目的として建てられた。設計者の建築家シンケルは、設計段階の1825年の時点で、小さな空間で絵画を見るほうが落ち着いて観察できるなどの指摘や、絵をかけるため可動式の木製のパネル(板)を利用する案など、展示と建築を関連させた提案をした<sup>(45)</sup>という事実にも驚かされる。

なお、神谷は、ベルリン旧博物館に続きミュンヘンのピナコテック(旧絵画館)およびグリプトテック(彫刻品陳列館)にも短く触れているが、これもファーガソンの著作との一致があり参考文献としていると推定される。以下がその論述である<sup>(46)</sup>。

其他獨乙に於てはミューニンのピナコテック及グリプトテック等美麗なる美術館にして殊にグリプトテックの内部の配置は歐洲中彫刻室の最完全なるものなりといへり

これに対応するファーガソンの著述は以下である<sup>(47)</sup>。

館内についていえば、グリプトテックはヨーロッパの他のどの彫刻展示室より良く配置され、採光の良い展示室である。(中略) 同じ建築家によってほぼ同時期に建てられたピナコテックは、ある点ではグリプトテックより優れている。外観も内部においても絵画展示室として適したデザインであり、他と取り違えるなど不可能であることを明確に示している。(筆者訳)

神谷は、グリプトテックの彫刻展示室を中心に簡潔にまとめている。以上、神谷はドイツの博物館3館を紹介しており、いずれもファーガソンの著作を引用した内容と看取される。

## 結語

明治26・27年(1893・1894)に発表された神谷邦淑の「博物館」は、日本初の博物館建築論であり、博物館学においては今日に通じる博物館思想を有する当時最長の論文であったが、これまで執筆の際の先行研究や参考文献は確認されていなかった。

本稿では、当該論文を精査し、論文中に引用された研究者名からイギリスの建築史家ジェームズ・ファーガソン (James Fergusson) を特定し、同著者の *The Illustrated Handbook of Architecture* (1855年) が建築史および建築様式を修得するための参考書であり、工部大学校において建築学を学ぶ学生にとって身近な存在であったことを確認した。

さらに、神谷の帝国大学工科大学在学中に、同大学図書館の所蔵書であったファーガソンの著作 *History of the Modern Styles of Architecture* (1873年、第2版。初版は1862年) を検証したところ、海外の博物館について神谷が論述した「建築の現例」に複数の一致点を確認することができた。今回の検証は、英国博物館(大英博物館)・サンクトペテルブルグの帝国美術博物館(新エルミタージュ)・柏林博物館(ベルリン旧博物館)・ミュンヘンのピナコテック(旧絵画館)およびグリプトテック(彫刻品陳列館)についてであったが、大英博物館を除く4館についての記述は、そのほとんどがファーガソンの著作を参考にしており、神谷論文における引用文献の一例が明らかになった。

明治20年代、海外の博物館を実際に見聞した人々が希少だった時代に、仮に神谷が文献のみを頼りに論文「博物館」を書き上げることが可能であったとすれば、すでに当時の日本には海外の事例を含む博物館の知識や博物館思想を導入できる環境が存在したということである。すなわち海外の建築学および建築史学の文献が、博物館思想導入の役割を果たした実例といえる。もちろん思想の導入には、博物館とは何か、博物館思想とは何かを当事者が理解していることが前提である

ことは言うまでもない。

神谷は、貴重な建築学の船載書の中から博物館思想を汲み上げ、建築学の論文でありながら博物館学においても先進的といえる論文をまとめた。「博物館」を卒業論文のテーマとして取り上げた神谷の博物館思想はどのように育まれたのか、興味は尽きない。

## 註

- (1) 神谷邦淑 1893-1894「博物館」『建築雑誌』第81号、第84号、第85号 日本建築学会 pp.255-260、pp.365-373、pp.20-26  
 神谷邦淑(1865-没年不詳)は、慶応元年(1865)、近江国膳所藩士の家に生まれる。明治21年(1888)、帝国大学工科大学造家学科撰科に入学し、同24年に卒業した。卒業後は、建築技師として、製鉄所(八幡製鉄所)技師・大阪府技師・海軍技師などを歴任した。没年に関しては、片野博の研究(註2)によれば、『建築雑誌』の会員名簿の記載が昭和12年版からなくなっていることから、この頃に逝去あるいは完全な隠居生活に入ったと推定されている。昭和11年(1936)、神谷は71歳であった。また、名前の読みについては、『日本現今人名辞典』では「かみや くによし」の記載となっており、本稿ではこれに従う。  
 なお、神谷の詳細な経歴については、研究を継続しており、別稿を準備している。  
 (日本現今人名辞典発行所編 1900「かみや、くによし 神谷邦淑」『日本現今人名辞典』日本現今人名辞典発行所 p.かノ85  
 人事興信所編 1915「神谷邦淑」『人事興信録 4版』人事興信所 p.か107)
- (2) 片野博 2001「八幡製鉄所初代事務所の建築家に関する調査報告」『日本建築学会計画系論文集』第66巻第544号 日本建築学会 pp.281-288
- (3) 青木豊 2012「神谷邦淑」青木豊・矢島國雄編『博物館学人物史 下』雄山閣 pp.123-127
- (4) 註3と同じ p.123
- (5) 註3と同じ p.127
- (6) 註2「八幡製鉄所初代事務所の建築家に関する調査報告」において、片野博は八幡製鉄所任用関係書類(東京帝国大学書記官から農商務省大臣秘書官宛の回答書)から、神谷邦淑が明治24年7月11日に帝国大学工科大学造家学科を修業したことを明らかにしている。  
 補完資料として、帝国大学より出版された『帝国大学一覽』を調査すると、『明治21-22年』版(1888、p.227)、『明治22-23年』版(1889、p.246)、『明治23-24年』版(1890、p.299)の3ヶ年分の「学生及撰科生徒姓名」の項に、神谷邦淑が造家学科撰科(1~3年)に在学していた記録が確認できる。
- (7) 神谷邦淑 1893「博物館」『建築雑誌』第81号 日本建築学会 p.255
- (8) 註7と同じ p.257
- (9) 岡倉天心 1888「博物館に就て」『日出新聞』9月2・4・5・6日(2012 青木豊編『明治博物館学基本文献集成』雄山閣 pp.17-30)
- (10) 下湯直樹 2012「岡倉天心」青木豊編『明治期博物館学基本文献集成』雄山閣 pp.366-367
- (11) 註5と同じ
- (12) 村松貞次郎 1959「二・三 工部大学校の建築教育」『日本建築技術史』他人書院 pp.56-57
- (13) 稲垣栄三 1972「1●2 明治以後の建築史学」日本建築学会編『近代日本建築学発達史』丸善 p.1688
- (14) 旧工部大学校史料編纂会編 1931「工部大学校学課並諸規則 明治十八年四月改正」『旧工部大学校史料』虎之門会 pp.318-319

- (15) James Fergusson, 1955 *The illustrated handbook of architecture : being a concise and popular account of the different styles of architecture prevailing in all ages and countries, Vol.1, Vol.2*, London, J. Murray.
- (16) 註13と同じ
- (17) 註14と同じ p.343
- (18) 註12と同じ
- (19) 註13と同じ p.322  
「第二十七章 学科細目 第一節 英學」には、「本校ニ於テハ諸学科ヲ教授スルニ概ネ英語ヲ使用ルヲ以テ英學ヲ教ルニ第一ノ目的ナル生徒ノ容易ニ英語ヲ解シ明瞭ニ能ク之ヲ談話シ之ヲ筆記スルヲ得セシムルハ極メテ緊要ナルコト言ヲ俟スト雖モ（後略）」と記されている。
- (20) 註6で補完資料としてあげた『帝国大学一覧』の『明治21-22年』版 (p.111)、『明治22-23年』版 (p.114)、『明治23-24年』版 (p.128) の3ヶ年分の「職員 講師」の項に、ジョサイア・コンドルの名前が確認できる。
- (21) G.W. Burnett, 1968 "Fergusson, James (1808-1886)", in Sir Leslie Stephen and Sir Sidney Lee eds. *The Dictionary of National Biography : From the Earliest Times to 1900 / Founded in 1882 by George Smith. Vol.6*, London, Oxford University Press. pp.1224-1226
- (22) デイヴィッド・ワトキン著・桐敷真次郎訳 1993「第四節 ファーガソンからバニスター・フレッチャーまで」『建築史学の興隆』中央公論美術出版 pp.164-165
- (23) 註22と同じ
- (24) 桐敷真次郎 1993「デイヴィッド・ワトキンとその『建築史学の興隆』」デイヴィッド・ワトキン著・桐敷真次郎訳『建築史学の興隆』中央公論美術出版 p.393
- (25) 菊池重郎 1972「明治初期の公刊洋書目録史考」『英学史研究』第5号 日本英学史学会 pp.153-168
- (26) 滝沢正順 1988「工部大学校書房の研究(1)～(3)」『図書館界』Vol.40 No.1, No.3, No.4 日本図書館研究会 pp.2-11, pp.120-135, pp.160-168
- (27) 池上重康 2011『明治初期日本政府蒐集舶載建築書の研究』北海道大学出版会
- (28) 註27と同じ pp.104-108
- (29) James Fergusson, 1873 *History of the Modern Styles of Architecture, Second edition*, London, J. Murray.
- (30) 神谷邦淑 1894「博物館（第八十四號の続き）」日本建築学会編『建築雑誌』第85号 pp.21-22
- (31) 註29と同じ p.339-340

(原文) If the British Museum is (中略) The ground was free of all encumbrances ; the design long and carefully elaborated before execution ; and money supplied without stint. If the buildings there have cost a million sterling, which is under the mark, it is no exaggeration to say that half that sum at least has been spent in ornament and ornamental arrangements, and at such detriment to convenience that already they are being abandoned, in spite of the money which has been wasted upon them. The courtyard to which the whole building was sacrificed is already gone, and the portico is voted a public nuisance ; though it will not be so easily got rid of as the other. Nothing, in fact, can well be more absurd than forty-four useless columns, following the sinuosities of a modern facade, and finishing round the corner ; (中略) the principal staircase of the Museum, lighted from the roof, is placed to the north in a situation which affords the best

light for a sculpture gallery of any in the Museum ; and a sculpture gallery, lighted by side windows, is placed facing the south, where its light is almost entirely shut out by the shadows of the portico. Even if it is contended that this is a pleasing object in itself, it can only be considered as a nuisance and an absurdity in the situation in which it is placed.

- (32) 真銅正宏 2008「特集 大英博物館から大英図書館へ」『総合情報センター報』No.33 同志社大学総合情報センター p.1
- (33) 岸田日出刀 1931「博物館建築の形畫」『国際建築』第7巻第1号 国際建築協会 p.11  
岸田は、陳列室の自然光線に関して、古くから実際知られたこととして「畫家や彫刻家のスタジオやアトリエで最も好ましい光線は高い側光」と述べ、レオナルド・ダ・ヴィンチの言葉「藝術家は物體の投影が物體の高さに均しくなるやうな光線の下で製作すべし」を引用している。また、ダ・ヴィンチの言葉による光線とは「射入角度四十五度の光線に外ならない。製作時に最も好ましい光線は、また製作品の觀賞時に最も好ましい光線である筈である」と解説している。
- (34) 半澤重信 1991「5-2 光・照明」『博物館建築』鹿島出版会 p.161  
半澤は、博物館における光について、「人工照明のない時代、未発達時代はもっぱら自然光に頼っていた。天井を高くとり、展示壁に光を当てるために奥行の浅い室形としたのである」と述べている。
- (35) 塚本敏行 2009「世界屈指のギャラリー「エルミタージュ美術館」」『Consultant』Vol.242 建設コンサルタンツ協会 pp.60-61
- (36) 桂川甫周著・亀井高孝校訂 1990『北槎聞略：大黒屋光太夫ロシア漂流記』岩波書店
- (37) 註30と同じ p.22
- (38) 註29と同じ pp.458-459

(原文) The new Museum of St. Petersburg is (中略) The site chosen was one of the finest in the city, on the banks of the Neva, adjoining the Winter Palace on the eastward. The building, which is now completed, measures 480 ft. from the river to the Million Street, and 350 ft. towards the river, divided internally into two courts by the picture gallery that runs across it. One of these courts is partially occupied by the grand staircase, the other is a void. Externally, each of the four faces differs somewhat in composition, though all treated with the same care. Where it has two storeys, it reaches 66 ft. in height ; where three, it attains 84 ft. to the top of the balustrade or coping. In the centre of the longer faces the apex of the pediment is 98 ft. from the pavement. These dimensions are quite sufficient for architectural effect, and it must be added that the building is wholly free from those falsehoods of design which ruin so many fine structures, especially those of this capital. The basement is plain and solid, the Order confined to the principal storey, and above this is only an attic, ornamented with antæ and pilasters. Each storey is complete in itself, and throughout there is that exquisite finish and beauty of detail which characterises Greek Art, and which, within certain limits, the Munich architects have learned to apply with such dexterity. (中略) The first is the painful want of projection in the cornices, and consequent flatness resulting from this defect ; especially in a three-storeyed building, with an Order belonging to one only.

- (39) 註30と同じ pp.22-23
- (40) 註29と同じ pp.460-461

(原文) Internally, the picture gallery crossing the court is arranged like that at

Munich — a great gallery in the centre — cabinets for small pictures on one side, and a corridor of communication on the other: — but this has additional meaning from the great staircase leading to it. The picture galleries are continued along the western face, and the whole is arranged, not only with great judgment and artistic effect, but also with regard to convenience. Great complaints are made of want of light in some of the apartments; and it is easy to see that this must be the case, especially in the basement. This would be otherwise if the building stood in sunny Greece; but it was unpardonable to forget that it was designed for the banks of the Neva.

- (41) 内田四郎 1904「繪畫陳列館」『建築雑誌』第206号、第207号 日本建築学会 pp.61-80、pp.141-149
- (42) Staatliche Museen zu Berlin (ベルリン美術館・ベルリンの国立博物館群) HP  
 “History of the Staatliche Museen zu Berlin” (「ベルリン国立美術館の歴史」)  
<https://www.smb.museum/en/about-us/history.html>
- (43) 註30と同じ p.23
- (44) 註29と同じ p.403  
 (原文) Although Berlin (中略), her Museum is a more perfect and more splendid building than any of the cognate examples at Munich. The portico consists of eighteen Ionic columns between two antæ, extending in width to 275 ft., and in height, from the ground to the top of the cornice, it measures 64 ft. It has also the very unusual advantage of having no windows in its shade, but an open recessed staircase in the centre, sufficient to give meaning to the whole; and now that the internal wall is painted with frescoes — though these in themselves are by no means commendable — it has more meaning and fewer solecisms than any other portico of the same extent which has been erected in modern Europe. The great defect is, perhaps, that it is not high enough for its situation. The space before it is large, and some of the buildings around it are high, while the square block which conceals the dome in the centre is not sufficiently important to give the requisite height and dignity to the building. It is also another proof of the extreme difficulty of adapting purely Classical Architecture to modern purposes, that most of the beauty and all the fitness of this beautiful portico disappear except when seen directly in front. The moment you view it in connection with the flanks, you perceive that it is only a mask to a very commonplace building, with three storeys of rather mean windows inserted in a stuccoed wall?
- (45) 三井麻央 2018「フリードリヒ・シッケルの建築と美術史ーベルリン旧博物館における絵画の展示をめぐるー」『ヨーロッパ言語文化研究』37巻 岡山大学文学部言語文化学科ヨーロッパ言語文化論講座 pp.21-35
- (46) 註30と同じ p.23
- (47) 註29と同じ p.398

(原文) Internally, the Glyptothek is better arranged and better lighted than any other sculpture-gallery in Europe: (中略)

The Pinacothek, which was erected about the same time by the same architect, is in some respects superior to the Glyptothek. Both externally and internally the design is that of a picture-gallery, and so clearly expressed that it is impossible to mistake it for anything else.